読者へのお願い

あなたはこの本を読まれてどんな感銘を受けられたでしょうか。その感銘をぜひ、あなたの親しいお友だちや、お近くの方々にお伝えください。それといっしょに「読後の感想」を、左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、この本には一字でも誤植がないようにしたいと思いますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教え願います。御職業、年齢などもお書きそえください ませんか。

東京都文京区音羽町三
光文社出版局
神吉晴夫

昭和三十六年七月十日　印刷
昭和三十六年七月十五日　初版発行

定価　四〇〇円

笛・はだしの女

著者　田宮虎彦
東京都武蔵野市吉祥寺一七九九

発行者　神吉晴夫

印刷者　堀内文治郎

印刷所　堀内印刷所
東京都千代田区神田三崎町二ノ一六

発行所　株式会社　光文社
東京都文京区音羽町三ノ一九
電話大塚（941）一一〇〇―九
振替東京一一五三四七

（小泉製本）

万一、落丁本、乱丁本がありましたら本社でお取りかえいたします。

© Torahiko Tamiya 1961

笛・はだしの女

目　次

佐久間象山の弟子　9
明治の婦人伝道師　18
笛　26
讃美歌　35
*
小さな歴史　44
孤児　52
*
時代をうつす眼　62
歴史の流れ　70
ある年譜　79
*
歴史と人間　88
*
小さな人　102

日記 105
池の運命 107
現代というミキサー 111
福知山にて 115
*
皇孫誕生 119
*
青春（京都） 127
*
チェホフのこと 144
Kのこと 147
三人の友人 151
森本薫と「女の一生」 154
*
炎について 157

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

*
ひき出しの中に忘れていた言葉 165
小さなラブ・レター 168
孤独な十姉妹 170
季節感 173
城 175
*
花園の人 177
*
大きな景色 186
夜景 189
足摺岬 一 192
足摺岬 二 195
岬について 198
*

広島・長崎・沖縄 201
*
沖縄（写真頁）
*
沖縄の中の日本の人 204
摩文仁 210
孤独な墓 213
辺戸岬 216
遠い東京 223
はだしの女 228
沖縄の唄と踊り 234
美しい沖縄 238
暑い沖縄 242
宮古島紀行 245
*
あとがき 255

装丁・加山又造

笛・はだしの女

三雲祥之助、小川マリ子両氏に——

佐久間象山の弟子

父のことをおはなしいたしましょう。と申しましても、ずいぶん昔のことになってしまいましたから、もうぼんやりとしかおぼえておりません。何しろ元治元年生まれの私は、もう七十の坂をとっくにすぎておりますからね。それに、今からおはなしする父のことは、明治のはじめ頃のこと、私がまだ十歳にもならぬ頃から、せいぜいが二十歳前後のこと、夢のような、大昔のような、いずれとりとめもないことばかり、あれこれが明治何年のことであったかさえ、はっきりとは思い出せませんから、まして、母や祖母から聞いた思い出ばなしなど、書きとめて下さっても、お役にはたたぬことでございましょう。

父は、私がものごころつきました頃は、俳諧師、それに漢学の素養もございまして、信州、その頃は筑摩県と申しておりました今の松本市北深志で小さな漢学塾をひらいておりました。といえば落ちついた風流人か学者とお考えになりましょうか。いいえ、そのことはあとで申し上げましょう。

父は、生まれは松代でございました。佐久間象山たら申す悪侍にいろんなことを仕込まれました

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のは、まだ母の夫として入婿して来る前の、松代におりました若い頃のことでございましょう。私も今、つい象山を悪侍と申しましたが、それは、祖母や母がつねづね申しておりましたことでございます。私の生まれました元治元年と申せば、象山先生が京都の三條木屋町通りにて刺客の兇刃にたおれた年でございます。前年の文久三年までは、先生は松代に蟄居されておりましたから、父は、祖母や母の眼をぬすんで松代の先生のもとへ通っておりましたようでございます。

祖母や母が聞かせてくれました父のことの一つに、奈良井川の川原で牛肉を炙って食べたということがございます。明治になります前、よつあしの肉を食べると家がけがれると申して、皆が嫌っておりました頃から、父は牛肉を食べることをはじめておりましたそうでございます。家がけがれるというより、一町四方も脂の焼ける匂いがたてこめますので、近所界隈から苦情が出ますし、仕方なしのことでございましょうが、物好きをあつめまして、川原に出て、肉を炙って食べたそうでございます。それも、もちろん象山たら申す悪侍に仕こまれたことでございましょう。

そう申せば、象山先生が横浜でうつされたとやら申す写真を父が愛蔵しておりましたが、その写真によりますと、先生は、額のばかひろい、眼のきつい、正面から真直ぐ見ましたその写真ではまるで耳がないようなこわい顔をなさっておられましたことを覚えております。

祖母や母が象山先生を悪侍と申しましたのは、当時の人々がみな先生をそう申しておりましたからでございましょうか、それとも祖母や母だけがそう申しておりましたのでございましょうか。

もし、それが、祖母や母だけが申していたのならば、それには、それだけの理由があったのでございます。と申しますのは、父が象山先生から仕込まれましたのは牛肉を食べることばかりではござい

ません。御存じのように松本は山畑ばかりでございますので、水田をつくるために、水揚げ機械を用いまして、山畑に水をながし、水田にするなどと申すことを企て、そのような会社をこしらえましたり、馬鈴薯から酒精（アルコール）をつくる会社をこしらえましたり、皮をなめす会社をこしらえましたり、そんな新奇な会社ばかりを、父は、つぎつぎにこしらえておりましたが、それも、やはり象山先生のお仕込みを受けた名残りではなかったかと存じます。

それが、一つでも成功しておりましたら、祖母にも母にも、象山先生は悪侍ではなかったでございましょうが、父の企てましたことは何一つ成功したものはございませんでした。その上、松代時代の父の友人のために請人（うけにん）になりまして、当時のお金にして五十円、百円という大金を父が弁償せねばならなくなったことがございました。その友人のことも祖母や母が象山先生を悪侍と申させたわけの一つであったと思います。

その父の友人のことは私もおぼえております。松代のお侍の次男坊のあばれん坊とかで、松本北深志の私の家へちょんまげに脇差をさしたその人がまいりまして、脇差を私の家において、東京へ出ていってしまったのでございました。脇差を私の家においていきましたのは、父に大金を支払わせた抵当ででもあったのかもしれません。

こんなふうに、何もかもが、一つとして成功することがございませんでしたので、父も心がふさいでいたのでございましょう。父は、ひどい大酒のみでございました。

その頃、北深志の家が火事に焼けまして、その家の地所の一部を新しく建ちました芝居小屋に売ったのでございましたが、そのお金を父にわたしておくと、みなのんでしまうというわけで、祖母がそ

のお金を親類にあずけてしまいましたところ、父は、それを親類のところにとりにまいり、少しずつせびりとっては、とうとう全部のんでしまったということでございます。最後には、母が私のためにとっておいてくれました私の嫁入り費用の貯えまで、父は母からうばいとってのんでしまったということでございます。

弟が生まれましたのは明治十三年でございましたが、この弟が数えどし四つの時から上手に字を書いたものでございます。まわりの人から神童とよばれた子供で、筆墨をあたえますと、「龍」というようなむつかしい文字をたちどころにたくみに書いてみせたものでございます。

この弟がまたまことにかわいい子供で、芝居小屋の看板絵の役者の眼のような大きな眼をしておりました。それで、近所の子供たちが、みな、この弟のことを「ヤクタ（役者）の眼」といってからかったのでございましたが、そんなかわいい子供がむつかしい字を書いてみせますので、今から思いかえしますと、あれは興行師であったのであろうと思いますが、弟を信州中、連れあるいて、見世物にしたのでございました。小さな弟に紋付袴を着せ、赤い毛氈の上に坐らせ、字を書かせるというわけでございますから、やはり見世物であったのでございましょう。

父はそんなからくりを知らなかったのでございましょうか。おそらく知っていたのでございましょう。知っていて、弟を連れあるかせたというなら、もちろん、数えどし四つの我が子供の、字を書いて見せたお金まで、父は酒にかえていたというわけになるのでございますけれども、そんな父が、ある日、ふっつりと酒を絶ってしまいました。

その頃、松本にメソジストの教会が出来ておりました。そして、その教会に牧師さんになって来ら

れたのが、やはり父が松代にいた頃の友人の一人で、父は、毎夜、その松本さんと申す牧師さんをたずねていくようになったのでございました。

毎夜と申しましても、はじめのうちは、たずねていかぬ夜があり、後に、その夜は、キリスト教の祈禱会がひらかれていた夜であったとわかったのでございました。ところが、ある夜のこと、不意に、母や私たちについて来いと申し、私たちがおそるおそる父のあとから教会へまいりますと、その夜は、教会で禁酒会がひらかれておりまして、父は、その席で、――今日から酒は一滴ものまぬと宣言したのでございます。

父の酒量はどれほどでございましたか、私はもちろん存じません。しかし、毎夜、酒をのんでおらぬ夜はなく、のめば十二時すぎる頃まで家には帰って来ることがなかった父でございましたから、酒をのまぬと沢山の人の前で申しました父に、母や私たちがまずあっと息をのむほどおどろいたことでございました。

しかし、それから十日たち、二十日たち、やがて、ひと月、ふた月と日がすぎていきますのに、父は、それこそ一滴の酒ものまなくなってしまったのでございます。母や私や妹や四つの弟までが、父といっしょに洗礼をうけましたのは、私たちが神を信じたからというよりも、あの大酒のみの父がぷっつりと酒をやめてしまったということのためであったと申してもよろしゅうございます。そんなことで洗礼をうけながら、私は、その教会で、ほんとうに神を信じている夫と結ばれ、後には、私自身が伝道師になったわけでございますが、その私のことはともかく、ここでは、父のその後のことを申しておきましょう。

前に私たちの家が火事にあいましたことをおはなししましたが、事業の失敗つづきのため、友人の借金の請人になっての弁償のため、私たちにとっては莫大なお金がすでになくなってしまっておりましたものの、その火事の後に建てました家は、まだ総二階の立派な家でございました。しかし、お酒をやめましたあとも、父は、お金もうけには縁のない人でございましたので、その家を月十円でお医者様などに貸し、私たちは別に小さな家を借りて住んでいたこともございます。後に、その家もまた火事にあい、焼けてしまいました。その家さえ残っておれば、父の苦しい晩年は、もう少しは楽にすごせたことでございましょう。

はなしがあとさきいたしますけれども、父は、これはこうと思いつめましたら、あくまで自分の思いどおりに押しとおさないではいられない性格でございました。あるいは、この性格も象山先生のお仕込みであったかもしれません。お酒をのむといえば、娘の嫁入りのための貯えまでのんでしまいましたのも、お酒をやめるといえば一滴のお酒さえのまぬようになりましたのも、そんな父の性格のあらわれであったと存じますが、洗礼を受けますと、父には、信仰の面でも、やはり、そのあくまで思いどおりに自分の考えを押しとおす性格があらわれ、すぐ、先祖代々の墓をこわしてしまいました。

当時、まだ布教をゆるされたばかりのキリスト教には、教会にも行きすぎがありましたので、それは、あながち父ばかりをせめるわけにはまいりません。仏や神の墓などにまいってはならぬ、花などそなえてはならぬなどと、教会でも、厳しすぎる教えを新しい信者たちに強いていたのでございました。しかし、先祖代々の墓をこわしたとあっては、親類たちがだまっているわけがございません。そのまま、私たちは、親類たちと縁がきれてしまい、二度目の総二階の家が焼けてしまいますと、もう

松本にいることも出来なくなってしまったのでございました。

もっとも、洗礼をうけましてから、二度目の家が焼けますまで、ほぼ十年ございました。その十年の間、父は、聖書を売ってあるく仕事をいたしておりました。横浜の聖書会社から大きな木箱にいれまして、聖書を送ってまいります。その聖書を大きな風呂敷につつみ、振分に肩にかつぎまして、日本国中を売りあるくわけでございます。

明治十六年にその仕事をはじめたのでございますから、信州に汽車などあるわけがございません。その頃は、松本から東京へ出ますにしても、三才山峠をこえて丸子町に出、軽井沢に一泊、翌日、碓氷峠をこえるといったように、埼玉県の本庄までまいらねば汽車にのれないわけでございました。左様でございますから、父は、重たい聖書を肩にかつげるだけかついで、草鞋で峠をこえていったわけでございました。

父が先ずまいりましたのは越後でございました。しかし、当時は、まだ聖書を買ってくれる人がございません。旅費とて充分にはございませんので、一向宗のお寺へまいりまして宿をかりるわけでございます。誰も買ってくれない聖書を、その寺の住職が先ず買ってくれました。ところが、僧侶にもいろいろの人があるわけで、買ってくれるどころか、半殺しの目にあいまして、雪の夜道に追い出されたこともございましたそうでございます。

こうして、越後から、京都、大阪まで、ある時は、甲州から東海道へと売りあるくわけでございましたが、聖書会社から旅費をくれるわけでなし、月給をくれるわけでもございません。旅費、月給は、一冊、一冊、聖書を売った売上げのうちから幾らかずつをくれますわけで、一冊も売れなければ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com